

古代の高砂を考えるさいに忘れてはならないのは、この地域の地形が現在と大きく異なっていたという事実です。

加古川の流れは米田町の船頭や米田新あたりで分岐し、高砂市中島の北側や南側を通過して伊保港へ注いでいました。

現高砂市街の大半は加古川の旧流路中か海中にあり、河口付近には砂州が発達して、島のようになっていました。伊保町や曾根町の方面では、海水が日笠山や伊保山・竜山のふもとと近くまで入り込んでいたため、やはり人の住める陸地は少なかったのです。

『播磨国風土記』をみると、のちの印南郡に相当する地域は「印南浦」という書き出しではじまりますが、この地域には大國里・六繼里・益氣里・含芸里の四つの里（のちの郷）が存在しました。このうち大國里は加古川市西神吉町大國、六繼里は加古川市や高砂市の米田町、益氣里は加古川市東神吉町升田、含芸里

は同町神吉をそれぞれ中心とする地域と考えられています。要するに、奈良時代に集落があったのは、加古川市の大國・升田・神吉などで、高砂市域では米田町がわずかに含まれる程度だったのです。

高砂市域の古代遺跡の分布状況もこのことを裏付けています。古墳時代を中心とする遺跡は、日笠山や伊保山・竜山のふもとや山腹、あるいはそれ以北、それに米田や小松原付近に限られています。現在の市域の南半分は水中に没していたか、低湿地であったと考えられるのです。

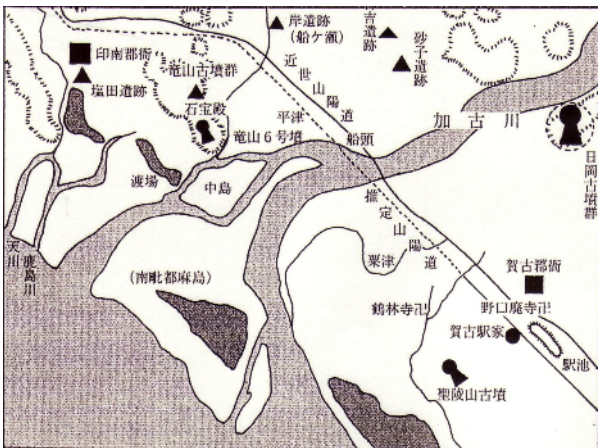
『風土記』には、「郡の南の海中に小嶋あり。名を南毗都麻と曰ふ」とあります。景行天皇の妻訪い伝承で有名なこの南毗都麻（隠妻）島は、加古川河口部に形成された砂州で、現在の小松原付近にあったと推測されています。『万葉集』巻三にみえる「可古の島」も同じ砂州をさすのでしよう。小松原では五世紀頃の

仿製鏡である狩獵文鏡が出土し、有力な集団が活動していたことをうかがわせます。

加古川の流れが幾筋にも分かかれ、海水が奥深く入り込み、沖には美しい小嶋が浮かぶ、古代の高砂はそのような景観の場所だったようです。「印南郡」というよりは、「印南浦」という方がふさわしい地域だったのでしょうか。

（市史編さん専門委員

西本 昌弘）



▶ 古代の加古川河口

松原 弘宣著

『古代国家と瀬戸内海交通』

吉川弘文館出版（2004年刊）